

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第7号
2015年3月

目次

伊東友乃	白菜	1	
	産み場	2	
	採りたての朝	4	
栗山佳織	朝の病室	6	
	祖父と祖母	8	
	通夜の後	10	
戸張雅登	グッドラック	12	
	おやすみ	14	
猫野エミリー	生誕祭	16	
	スナフキンガール	18	
	あなたのそばで	20	
畑ゆめじ	10月の空は	21	
	ホットケーキ	22	
村瀬くれな	さよならの惑星	24	
	夜道	26	
	金木屋	28	
渡辺信二	ついにあの方が帰った	29	
	天上の応答-ディキンソン J 六二一を読む	30	
	眠れぬ羊の子守唄	32	

表紙原画	鈴木順三	表紙	「彼女は空へ1」
		裏表紙	「彼女は空へ2」

白菜

伊東友乃

白菜よ ざくつ とおもいつきり
切ってやろう
ためらうことがおおい日々のなか
おまえは 恩寵のように
まないたの うえにおかれている
あわい春のひざし色
そんなやさしい層で
みずみずしく よりそっているのに
すまぬ 白菜 しかし
おまえを ざくつ と切って
ふりきれる 想い も
また ここに あるのだ
ざくつ の音にのせて
おまえの いのち いま しかと

産み場

伊東友乃

あしたの あさが
まみどりのろくに濡れたら
わたしの 子宮から
あかんぼうが そろそろ
顔を だすころです
産み場 まっさかりの 地球にしてみれば
わたしの ありふれた
あふれる いのちに
(もちろん) 海のなみだを
ながすことも ないのです
(埋もれても こぼれても
あたらしい いのちが
つぎつぎに 転がつていく)
それならば それならば

せめて この両の手のひらに

抱ける大地 一㎡ほどを

わたしの 産み場と いたしましょう

おおきく いきんで

きりきり 歯を かみしめ

せいっぱい みおもな身体を

ふり しぼり

ああ まったくの

かいかんのなか

地球の 底 めがけ

いのち ひとつ

すべらせて やりましょう

採りたての朝

伊東友乃

うす暗い部屋のなかで

採りたての

朝　を　あなたのまえに　ごろりつ　と　転がして
この手でひらいてみせよう　か

成熟しきらなかった　言葉が

青くさく　たがいの体温に　しみついたままなので

（汗は　もうすつかり　とおくの海まで　干あがつて）

ずるずる　つづく受胎的な行為よりも

わずかでも　対峙しあえる行為が

私たちには　必要だった

(古代魚の ように シーツのなかに 潜りたく)

いちまい いちまい 朝 を 剥ぎながら

眩しい ひかりを 滴らせ

その うえに 揺れる あなたの 眼差しを

朝の病室

栗山佳織

ペースト状の朝食の後

透明なアルコール臭に

うんちやおしっこ匂いがかすかにまじって

車椅子で動ける人たちは

音も立てずに廊下へ出ていく

すこし窓を開けましょうか、と看護師さんが言っ

て病室に春先の冷たい空気が入ってくる

祖母は不思議そうにわたしを見ると

すぐに薄いまぶたを閉じてしまう

わたしの名前も、わたしの記憶も

ぜんぶ忘れて

おばあちゃん、どこへ行くの

上向きの小さな鼻の穴からもれる祖母の寝息は
がらんとした病室を抜けて
振り返りもしない

祖父と祖母

栗山佳織

意味のわからないイタリア語が

茹で立てのショートパスタより幸せそうに

船頭の鼻先で踊って飛んでいく

二十年ほど前のヴェネチアの陽光に

祖父の濁ってしまった小さな目が輝く

(ゴンドラに祖母と二人で乗っていたとき

遠くの水面は眩し過ぎて見えなかったでしょう)

祖父は心許ない足取りで

長患いの祖母に一日置きに会いに行く

二人で出かけることなどできないほど

年を取ってしまったて

おしゃべりの代わりに脈を取る

指の腹にかすかな拍子を感じて安心するのだと
うれしそうに話す

「ばってん、なしてこげん難しか病氣にならんばいかんかったとや」

病室の窓から冬の眩しい陽射しが

小さな二人を照らしている

祖母が横たわるしろい小舟を

少しずつ祖父は川へと送り出す

通夜の後

栗山佳織

トンネルを抜けるたびに雲は厚くなり

山向こうの盆地では小雪がちらついていた

「どこのお嬢さんね、よう子ちゃんの子ねえ」

早う座んなさい、ご飯ば食べなさい、

ビールは飲まんね、ここの煮しめはおいしかよ、

会釈と同時に四方から声が飛んでくる

母は棺の中の祖母を見て

ただ眠っているみたいでしょ、

言い終わるより先に泣いている

化粧が施されたその顔は

不安が過ぎ去り

覗き込むわたしたちを静かに映す

祖母が亡くなってみんなが集まり

食べたり飲んだり、立ったり座ったり

冷えた煮しめを噛みしめると

あまい出汁に祖母の記憶が広がっていく

グッドラック

戸張雅登

上から降ってくるのはチャンス
下に落ちているのは一オンス
金貨一枚 空に弾いて掴みとる

でかいカラスが狙う俺のコイン
鋭いくちばし ぎらつく目
一本道での一騎打ち

胸を張って迎え撃つ
ぶれない視線は真つすぐに
「来るなら いつでも来な」

寸胴な体が舞い上がる
騒がしい黒い翼 不吉な声

俺の視界を横切って消えた

軽快な足取り 呼び止められる俺

コインを探す勝利の女神

「それって、これのことですか？」

笑顔の俺 舞い降りたチャンス

勝負はまだ始まったばかりだ

おやすみ

戸張雅登

夜に力が湧くと信じる君
朝に頑張れると思う僕

「朝起きれないかもしれない」
眠りにつくことに怯える君

君は今夜ベッドに横たわり 答えなくなるだろう
それでも朝には起き上がる 新たな君となって

「そのとき私はあなたを覚えているかしら？」
黒い髪の奥から覗く瞳

「十年後になろうとも 僕は君を待っているよ」
手を握る僕 自然な笑顔を作ってみせる

少し開けた窓から夜風がそよぐ

澄んだ空気が鼻を突き抜ける

夜の世界は静まり返り 僕らは宙のなか

枕元のスタンドライトを消して 月明かりを招き入れる

生誕祭

猫野エミリー

生れ落ちるということは

いつか天上に召されゆくことその約束

天使たちは歌う

m e m e n t ・ m o r i

〈だから楽しみなさい、今を〉

生まれるということは

墓に入る人が増えるということ

天使たちは歌い続ける

m e m e n t ・ m o r i

花が咲くころにあなたは生まれ

鳥が鳴くころに愛を知り

風が吹いて別れを想い

月が光るころに此の世を去った

人間が幸福しあわせを幸福と呼べる時まで、天使たちは歌うだろう

スナフキンガール

猫野エミリー

「母の胎内から 旅してきました」

スナフキンガールはどこまでも

渚に打ち上げられた誰かの部分から

スナフキンガールのからだは成り立っている

愛だとか友情だとかはつるつるして

スナフキンガールのところは

いつも脆くてざらざらしている

「歩く 食べる のむ 眠る

生活はこんなにも単純で

それと同時に力強い」

それが スナフキンガールが見つけたこと

生れ落ちた誰もがスナフキン

帽子を被って出掛けよう

誰でもないよ

何のものでもないよ

毎日はグッバイばかり

傷だらけのころはひそやかに

スナフキンガールを恐ろしい魔物にしてゆく

今いる場所よ さようなら

今までのスナフキンガール

お前の生き方に

別れを告げよう

いざ さよならからの出発

あなたのそばで

猫野エミリー

世界で私はひとりぼっちだと思う

日もある

でも

生きているということに

うれしくなる

日もある

落ち込んだり

跳ねあがったり

心のグラフは不安定だ

それでいいと

それでもいいと

笑える日が来るだろう

そのとき私も

あなたのそばで

笑いたい

10月の空は

畑
ゆめじ

10月の空は自由への行進

今わたしたちが踏み出す一步を
何百何千の鼓笛が 鼓舞する

スネアドラムは心臓の鼓動

バスドラムは 確かに地面を蹴り上げて
ラッパのファンファーレが

希望の門を 開けはなつ

たくさんのおおきなブレスが

空いっぱい意思を奏で

その震えは 終わりを知らない

太古の時代から 遠い未来まで

永遠につづく自由への行進

ホットケーキ

畑
ゆめじ

なんだかさびしい夜は
ホットケーキを焼く

ぽこぽこぽこと

私を吸い込む穴が

君に顔を出し

さあ 今だよと

君が言うので

私は

さささと

返しをすべりこませ

せいやつと

ひっくり返す

まんまるお月様

深く息を吸い込むと

甘いにおりが胸を満たして

私は思わず目を閉じる

もう 大丈夫だよ

君の声が聞こえる

さよならの惑星

村瀬くれな

僕たちの暮らす 惑星はさよならでできている

僕は震えながら

この星の端っこで膝を抱えて

少しずつ終わっていく時間を

ただ 息をしながら眺める

吐く息が 銀色に凍る

まつげの先がその湿度の雫で濡れる

寒さに目の周りが赤くなる

(毎日積もるさよならの重さに)

(これから僕の身体は押しつぶされて)

(かたい 岩石になるんだろう)

「ブナの落ち葉が 茶色の化石に変わるのと全く同じだ」

それとおなじように

冷たく固まっていくのはけれど 何？

すべてが消えてしまったあと

この大地を誰か掘り起こしてくれ

いのちのやわらかさを失う そのときまで

さよならがしずかに降り積もってゆく

夜道

村瀬くれな

街灯のない暗い道がこわい

おぼけがこわい

あの人の表情がこわい

先が見えないものがこわい

夜空は真っ黒で広がっていてこわい

星が光っているのもこわい

やっぱりあの人の表情がこわい

今日 今日を生きてきたことがこわい

ふと後ろを振り返れない

さっきまで歩いて来た道は

口を開けている落とし穴ばかりだ

もしかすると落ちて死んでしまっていたのに

これまでのうのうと歩いてこれたけど
気づいたいまは

もう後ろを振り返れない

追いつかれてしまう 時間の問題で

だから走って逃げる

気がつかないうちにいつも

早足になっている私はなにより私がこわい

金木犀

村瀬くれな

金木犀

金木犀

ばらばらと地面に落ちたのが
夕焼けの中で あせていく
夏の日がこぼした光の粒たち

橙色の星の形 左手の上に乗せてみて
香りを胸まで吸い込んだら
空気は私のしらないうちに
ひんやり よそ行きの顔

金木犀

金木犀

ばらばらと地面に落ちていると
夕焼けが いつもより赤くなる
昨日よりも早く 太陽は沈んでしまった

ついにあの方が帰った

渡辺信二

どこへ帰った？

永遠に

いつ帰った？

永遠に

なぜ帰った？

海と空の混じりあう

安らぎの場所に戻るためでしょう

なぜ帰った？

もはや救いきれないと分かったから

なぜ帰った？

残されて おれたち

いつまでも阿修羅のままだ

天上の応答

——デイキンソンJ六二一を読む

渡辺信二

わたし とても辛かったから

天上に 救いを求めた

悲しみに心煩わされなくて済むのなら

代わりに この命を差し上げますと言いました

すると仲立ちの商人が ヌツと顔を出し

「イノチ、だって？ まだイモリのほうがマシだ」
とバカにしたように言い放ちます

「命です わたし 今すぐ死んだっていいんです」

「そんなのもらっても 扱いに困るな」

「わたしの人生そのものですよ」

商人は せせら嗤って

そつぽを向いたまま言いました

「そういうヤツが多んだよ

おれは今 棚卸しで忙しいんだ

もつとましな

もつと売れそうなものはないのか？」

眠れぬ羊の子守唄

渡辺信二

この頃は昼夜分かたず騒がしく

眠れぬ夜が続くので 羊が試みるのは

人の数を数えてみることに

だけど 人は多すぎる

ともかく どうだろう 今日一日

あの草原に寝転がった人を数えてみるのは

そんな気ままな時間の過ごし方をする人が

今どき この地球に いるかどうか・・・

ああ いたいた 一人 二人

三人・・・あれ みんな動かない

ああ 殺されているんだ

緑を鮮血に濡らしてる

まだ眠れないのに なんという悪夢

明日 わたしたち あの草を食べるのか

14. 08. 01から、15. 02. 28のあいだに贈られた詩誌・詩書一覧

『タルタ』 29, 30。

『Aurora』 19。

『火片』 185, 186。

『空想カフェ』 17。

『りんごの木』 37。

『勾玉』 3。

『ENTASIS』 11。

『ほしのたね』 6。

『万河・Banga』 12。

『りんごの木』 38。

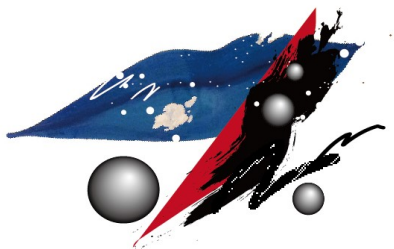
『8日の月』 3。

『ひよこの空想力飛行ゲーム』（秋亜綺羅）思潮社。

『ひとりごと』（大林雄治）日本文学館。

『アイスクリームの皇帝』（柴田元幸選・訳／きたむらさとし絵）河出書房新社。

『ホッパー大佐対真夜中の滝』（鈴木恵美子）思潮社。



詩誌『立彩』第7号 2015年3月1日 頒価800円

編集発行 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園4-5-3

フェリス女学院大学文学部英米文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311